日本当局の歴史教科書改ざんの真相

朝鮮・平壌

チュチェ90（2001）

日本当局の歴史教科書改ざんの真相

朝鮮・平壌
外 国 文 出 版 社
チュチェ 90（2001）

朝鮮民主主義人民共和国歴史学会は、日本当局が国際社会の一致した抗議と糾弾にもかかわらず、歪曲された歴史教科書をそのまま教育に導入しようと策動していることと関連し、2001 年 6 月 28 日、日本の歴史歪曲策動の真意を暴露する次のような文を発表した。

最近、日本当局は国際社会の一致した抗議、糾弾にもかかわらず、かつて日本が朝鮮やアジア諸国で強行した犯罪的な侵略戦争と野獣じみた蛮行、強盗さながらの行為を美化、もしくは無視、隠蔽した中学歴史教科書を検定「合格」とした。

検定に合格した教科書は、内外の強い抗議によって原文の内容が一部修正されたものだとはいえ、いまなお 40 数か所に罪悪にみちた朝鮮侵略の歴史を歪曲、美化した事項がそのまま残っている。

にもかかわらず日本当局者は、これ以上修正することはできないとして、これをそのまま教育に導入しようと策動している。

日本当局の朝鮮史歪曲行為は、かつて日本帝国主義の朝鮮人民にたいする犯罪行為を合理化することによって、軍国主義者の前轍を踏んで再び侵略の道を歩もうとする企みの現われであり、朝鮮民族にたいする許しがたい冒涜であり、また日本帝国主義の侵略と虐殺、略奪の歴史を正しく記述することを求める朝鮮人民と世界の公正な世論にたいする公然たる挑戦である。

よって、朝鮮民主主義人民共和国歴史学会は、日本当局の歴史歪

曲行為を重大視し、かれらが歴史の真実と罪悪にみちた侵略の歴史をいかに臆面もなく歪曲し、狡猾に美化、隠蔽しているかを暴露、断罪し、歴史歪曲策動の真意を全世界に告発するものである。

1　日本の朝鮮支配を歴史的に合理化するための破廉恥な捏造

検定に合格した歴史教科書には、初期朝・日関係史をはなはだしく歪曲し、論破されて久しい「任那日本府」説に固執している箇所が随所に見られる。

「任那日本府」説とは、日本が 4 世紀以降数百年にわたり朝鮮南部地域の任那（ミマナ）に「日本府（ミヤケ）」を設置して支配したという主張である。

この説はすでに久しい前から、朝鮮の北と南の歴史学者と日本の良識ある学者の研究結果によって完全な捏造であることが確認されている。

「任那日本府」説にたいする抗議の声が高まると、修正本では巧妙に「日本府」という用語を「拠点」と変え、大和政権が「半島南部の任那（伽羅）という地に拠点を築き」、6 世紀に「任那から撤退し、半島政策に失敗した」と改ざんした。このように新しい検定教科書では表現を変えただけで、「任那」支配説をそのまま残している。

これを合理化するため、教科書では 4 世紀当時にはまだ西部日本の統合も実現できなかった畿内大和政権を統一政権として描写し、

この政権が朝鮮に出兵して南部地域を支配したかのように歴史を歪曲している。

4 世紀にまだ西部日本を統一しえなかった一つの地方政権が海外に進出し、新羅（シンラ）と百済（ペクチェ）を屈服させてそこに植民地を設置したというのは理不尽である。まして高句麗（コグリョ）の広開土（クァンゲト）王碑文を恣意的に解釈して、4〜5 世紀に大和政権の軍隊が朝鮮南部で縦横無尽に活動したかのように描写しているのは、当時の史実とはまったく合わない捏造である。

これとは反対に、歴史的事実はこれらの事件が日本の吉備地方（現在の岡山県一帯）に形成された任那（伽羅）、コマ（高句麗）、クダラ（百済）、シラギ（新羅）など朝鮮系の諸小国と畿内大和政権とのあいだに起こったことであることを示している。『日本書紀』に記述されている「任那日本府」とはほかでもなく、6 世紀頃に吉備地方の伽羅（任那）小国に設置された大和政権の臨時行政機関（大和の日本府）であった。かつて日本帝国主義の御用史家は、日本の朝鮮支配を歴史的に合理化する目的で、日本で起きたこの事件の舞台を朝鮮に置き換えたのである。

このような歴史的事実を無視して歴史教科書で、かつて植民地主義御用史家によってでっちあげられた「任那日本府」説を臆面もなく再び持ち出してきたのは、不純な政治的目的によるものである。日本当局者は育ちゆく新しい世代に「任那」説を注入しつづけることによって、大和民族は千数百年前から朝鮮に植民地をつくって朝鮮民族を支配した「すぐれた民族」であり、朝鮮民族は早くから日本に支配された「劣等」民族であることを信じ込ませ、かれらに植民地主義思想、朝鮮再侵略の野望を吹き込もうとしている。

このような民族排外主義的思想は、教科書のこの部分で、かつて日本帝国主義者が朝鮮と朝鮮民族を蔑視して使った「半島」「半島人」という語句をそのまま用いて「半島政策」「半島南部」と記述していることにも現われている。さらにかれらは、大和朝廷に「新羅も百済も…朝貢した」などと事実無根のことまでためらいなくつくりだし、未開地の日本に発達した朝鮮の文化を伝播した文明の先導者を「帰化人」と冒涜した。はなはだしくは百済の国名がはっきり印されている「百済観音像」までも日本のものだと強弁している。

歴史教科書はまた、日本の朝鮮支配を歴史的に「合理化」する目的で、日本歴史の「優秀性」を人為的に強調し、その比較、傍証の具として朝鮮の歴史を引き合いに出し、朝鮮の歴史は従属の歴史で、朝鮮民族は歴史的に「属国」の運命にあったかのように歪曲している。

朝貢についていうならば、それは中世アジアにおける大国と小国間の儀礼関係、変形的な交易関係であって、近代的意味での宗主国と属国の関係ではなかった。「朝鮮に宗主権をもっていたのは清朝だった」とし、「中華秩序」なる言葉をつくりだして朝鮮が「中国の歴代王朝に服属」していたと記述しているのも、事大主義的な外交形式を本質とみなした悪どい歴史捏造である。

とりわけ、高麗(コリョ)がモンゴルの「属国」であったとする記述は、まったく常識はずれの捏造である。

13 世紀の初葉、中葉に、高麗の人民はほぼ 30 年間にわたりモンゴルの侵略に抗して戦い、ついに「和親」を結んで高麗政権を保持することができた。当時、広大なユーラシア大陸がモンゴルの支配下に入り、チンギス・ハンの後裔が直接統治するモンゴル汗国が建

てられたが、高麗だけはその主権を維持した。もっとも、モンゴルの達魯花赤（タロカチ）が一定の期間、高麗の西北および東北地方を統治したことはあるが、総じて高麗は国土の全地域でその主権を確固と行使した。したがって両国の関係は宗主国と属国の関係ではなかった。モンゴルの支配層でさえ、高麗は「天下で臣下として服従しない」国であると言っているのは、両国関係の実相を示していると言える。

この厳然たる歴史的事実を否認し、高麗がモンゴルの「属国」であったとする記述は、国の自主権を守りぬいた朝鮮民族の誇らしい歴史にたいする許しがたい歪曲である。

このように日本の歴史教科書では、朝鮮の歴史を多く扱いながらも、朝鮮史の誇りとなる事実には目をつむり、日本の「優越感」をあおるのに助けとなることであれば見境なく歴史を歪曲している。これは、日本の朝鮮支配説を歴史的に「合理化」し、新しい世代を再び侵略の道に駆り立てようとする企みから発しているとしか言えない。

2　朝鮮占領のための侵略策動を美化

教科書は日本の朝鮮侵略と支配を合理化するため、地政学的論理を振りかざして「朝鮮半島脅威」説を持ち出している。

修正される前の教科書に「この日本に向けて大陸から一本の腕が突き出ている。それが朝鮮半島だ。朝鮮半島が日本に敵対的な大国の支配下に入れば、日本を攻撃する格好の基地」となるため、「後

背地をもたない島国の日本は、自国の防衛が困難となる。この意味で、朝鮮半島は日本に絶えず突きつけられている凶器となりかねない位置関係にあった」と記述されているのが、その一例である。

朝鮮を日本の安全を脅かす「凶器」と規定したことにたいし抗議の声が高まると、修正本では「凶器」という表現のある部分を削除したが、朝鮮半島が日本にとって「脅威」となるという「朝鮮脅威」説の本質的内容はいささかも変わっていない。

「朝鮮半島脅威」説は本質において、日本は自国の安全のために必ず朝鮮を征服して支配下に置かなければならないという強盗さながらの侵略論理であり、地政学的位置が変わらないかぎり朝鮮支配の野望を捨てないという露骨な再侵宣言である。

歴史的事実は、朝鮮が日本の安全を脅かす「腕」となっていたのではなく、日本が代々朝鮮侵略の刀を握った腕であったことを示している。

1592～1598 年の「壬辰倭乱（文禄・慶長の役）」の際、豊臣秀吉は朝鮮を中国侵略の門戸、橋梁とみなし、悪名高い「田中上奏文」においても朝鮮を大陸侵略の橋頭堡とみなし、中国を支配するためにはまず朝鮮を占領しなければならないと主張した。実際に、朝鮮を占領した日本帝国主義は、朝鮮を足場にして満州を侵略し、中国大陸へと戦争を拡大した。

それにもかかわらず、歴史教科書では朝鮮侵略を自国の安全のための正当防衛と描写し、「征韓論」や「江華（カンファ）島条約」、「韓日合併」など強盗さながらの侵略行為を合理化している。

「征韓論」は 19 世紀中葉、西郷隆盛を頭目とする薩摩藩出身の日本軍国主義者によって提唱された「朝鮮征服論」であり、それを

「国策」と規定し、「征韓」の道を突き進むことになったのは、海外侵略によって国内の矛盾を解消し、同時に資本主義の初期蓄積の源泉を確保しようとする日本政府の対内政策の必然的結果であり、その延長であったのである。

にもかかわらず、教科書は「1873 年、日本の開国のすすめを拒絶してきた朝鮮の態度を無礼だとして、士族たちの間に武力を背景に朝鮮に開国を迫る征韓論がわきおこった」と記述して、「征韓論」があたかも日本政府の「国交」樹立の要求を拒絶した李朝政府の「無礼」な態度のために台頭したかのように真実を歪曲している。これは実に盗人たけだけしい強盗の論理である。

こうした破廉恥な手法は「雲揚」号事件の記述にも見られる。

教科書は「雲揚」号の侵入事件について「日本軍艦が朝鮮の江華島で測量をするなど示威行動をとったため、朝鮮の軍隊と交戦した事件」、「砲撃された事件」などと模糊たる表現を用い、この事件をきっかけに「日本は再び朝鮮に国交の樹立を強く迫った」として、事件の全貌と目的をはなはだしく歪曲、美化している。

周知のように、日本軍艦「雲揚」号は測量のために江華島へやってきたのではなく、武力挑発をおこなって朝鮮に不平等条約を強要する口実をつくるため、計画的に派遣された侵略の先兵であった。他国の領海で測量をするには当然、事前にその国の承認を受けるのが国際的慣例であったにもかかわらず、日本軍国主義者はそうしなかった。艦長井上は、事前に日本政府から軍事偵察と江華島攻撃の任務を受けていたのであり、そのために、即時退去せよという朝鮮側の要求に応じようとせず、飲料水が切れたという口実を設け、草(チョ)芝鎮(ジジン)砲台まで前進し続けた。これにたいし朝鮮の軍隊が自衛的措置

をとると、待っていたとばかりに草芝鎮砲台に猛烈な砲撃を加えた。さらに、防御施設がまったくないか貧弱な頂山（チョンサン）島と永宗鎮（ヨンジョンジン）を襲撃し、多数の罪のない住民を殺戮するという蛮行を働いた。「雲揚」号事件の全過程は、朝鮮側の発砲を誘発して事件を拡大し、それを口実に不平等条約を強要して侵略の足場をつくり、「征韓論」を実践に移すための計画的な軍事作戦の一環であったことを示している。にもかかわらず、こうした隠れもない歴史的事実を隠蔽し、侵略を「測量などの示威行動」、武力挑発や虐殺行為を「交戦」と美化するのは、被害者である朝鮮民族を憤激させる歴史の歪曲である。

日本軍国主義者はこうした武力挑発と圧力を加えつづけたすえに、1876 年には李朝政府に「江華島条約」の締結を強要したのである。

この条約により日本は朝鮮侵略の道を開き、政治、経済、軍事の各分野において朝鮮を従属させる足場を築いた。しかし、歴史教科書は「江華島条約」の締結により「長らく懸案であった朝鮮との国交が樹立した」とのみ記述することによって、この条約の侵略的性格と目的を故意に隠蔽している。

歴史教科書は、近代的改革をめざす朝鮮人民の闘争史も完全に歪曲している。

19 世紀の後半期にいたり、朝鮮においても社会発展の合法則的要求にしたがって主体的力量による近代的改革運動が展開された。封建社会の胎内から発生、発展しつつあった資本主義的関係を反映して開化思想が芽生え、開化派が形成され、かれらによってブルジョア改革運動が繰り広げられた。

しかし、歴史教科書はこれとは反対に、日本が朝鮮の近代化にな

んらかの「寄与」をしたかのように記述している。「甲申政変」を主導した金玉均（キムオクキュン）を「親日派」と規定することによって、「甲申政変」があたかも日本の差し金によって起こったかのように記述し、その失敗の原因も清国の干渉にのみ帰結させ、日本の背信行為について触れなかったのは、その一例である。歴史的事実はどうであったか。日本は政治資金調達のための開化派の活動を破綻させ、新式軍隊を養成しようとしたかれらの試みも水泡に帰させた。のみならず、政変が起こったとき、新政府が陣取っていた王宮に清国軍が攻撃をかけてきた決定的瞬間に、王宮警護に動員されていた日本の守備隊を撤退させて政変を鎮圧させるという背信行為を働いた。

まさにこれが、歴史教科書に日本が朝鮮の近代化と独立に寄与したかのように記述された歴史的事実の一端である。

こうした歪曲行為は甲午農民戦争の記述にも見られる。

甲午農民戦争は、「斥洋斥倭」、「輔国安民」のスローガンのもとに日本の侵略に反対し、国の独立と近代化、人民の安寧のために決起した大規模な反封建・反外勢農民戦争であった。農民軍は三南（忠清道、全羅道、慶尚道の総称）のほとんど全地域を解放し、意気衝天、漢城（ハンソン）（ソウル）を目ざして進撃をつづけた。勝利は時間の問題であった。しかし、この決定的瞬間に日本侵略軍が蜂起軍を容赦なく鎮圧することによって、日本はここにおいても朝鮮の自主独立と近代的発展を阻んだ朝鮮民族の不倶戴天の敵としての正体をさらけ出したのである。にもかかわらず、人間屠殺者としての罪業を隠し、甲午農民戦争を「東学の乱」として、その反侵略的・反日的性格を骨抜きにし、その意義を宗教運動に限定したのは、朝鮮を植民地化するための日本の侵略行為を正当化し、朝鮮の近代化運動を

阻んだ罪業を覆い隠そうという目的から発した醜悪な歴史捏造行為である。

3　植民地支配の罪悪行為を無視、隠蔽

日本の中学歴史教科書は、朝鮮を強制併合した日本帝国主義侵略の強盗的性格を隠蔽し、朝鮮占領が日本の「安全」と当時の国際的思潮からして必要な措置であったかのように記述し、植民地支配の罪悪行為を隠蔽して、それが朝鮮の近代的発展に寄与したものと美化している。

日本帝国主義の朝鮮占領は、なにをもってしても正当化できない特大国家犯罪である。

それにもかかわらず、教科書は当時、「日本政府は、韓国の併合が、日本の安全と満州の権益を防衛するために必要であると考えた」とし、また朝鮮占領にたいして「イギリス、アメリカ、ロシアの 3 国は、…異議を唱えなかった」、「韓国の国内には、一部に併合を受け入れる声もあった」と記述している。

「日本の安全」のために朝鮮占領が「必要」であったというのは、弱小国を自国の利益に供するものとみなす、まったくアナクロ的な大国主義的かつ国粋主義的思考方式であり、日本軍国主義者に固有な「朝鮮半島脅威」説に根ざす妄説である。この主張の根底には他民族をさげすむ思想と大和民族の「優越性」を宣伝する極悪な人種主義思想がひそんでいる。「満州の権益保護」を云々するのもつまるところ、日本が他の大国の侵略から満州を「防衛」しなければな

らないということであるが、これは本質において「おれが生きのびるためにはお前を食わなければならない」という弱肉強食論のむき出しの主張である。今日、自主時代に「政治大国」を気取り、国連安保理事会常任理事国になるため奔走する日本軍国主義者の思想・意識と倫理・道徳水準はこのように低劣である。

極少数の親日売国奴が日本の朝鮮占領を支持したことを大仰に強調したのも、まさにこのような思考方式の産物である。われわれはここに、何人かの親日売国奴の応援に頼らざるをえない日本当局者の哀れな姿をかいま見ることができる。また、イギリス、アメリカ、ロシアなどが「異議を唱えなかった」としたことについて言うならば、ロシアは日露戦争で敗北し、自国の領土まで奪われた状態で、他国の領土が併呑されることについてとやかく言う余地がなかったし、イギリスは「日英同盟」、アメリカは「桂――タフト協約」によって口をふさがれた立場にあったのである。日本当局者が朝鮮占領の「正当性」を説くために探し出した歴史的事実は、このようにすべて途方もないものである。現代の諸人民はこうした強盗さながらの思考をするものを指して「政治小児」と呼んでいるが、日本軍国主義者こそは現代の政治小児と言わざるをえない。

歴史教科書は、日本帝国主義の国土併呑の真相も悪辣にゆがめている。

教科書は、「安重根（アンジュングン）が伊藤博文を満州のハルビンで暗殺」したので、「日本は韓国を併合して植民地にした」とする一方、朝鮮人民の反侵略闘争を弱化させ、反日義兵闘争や民族あげての反日愛国抗争である3･1人民蜂起など各種形態の反日闘争を無残に弾圧した蛮行については全然言及していない。

伊藤が誅殺された要因は明らかにせず、その「報復」措置として朝鮮を併呑したかのように歴史をゆがめ、数多くの反日闘士を無残に殺害した事実を隠しているのは、日本帝国主義の朝鮮占領を合理化し、植民地支配が朝鮮人民の強い抵抗を受けることなく、順調に進められたかのような認識を与えることによって、日本の過去の罪業をうやむやにし、反省、贖罪の根拠を抹消するためである。

日本当局者の教科書改ざんでもっとも犯罪的なのは、罪悪にみちた植民地支配を美化し、人民虐殺や資源略奪、強制連行などの特大犯罪にはまったく言及していないことである。

日本帝国主義は朝鮮を不法占領して以来、40 年余りの植民地支配の期間に、朝鮮人民に奴隷の運命を強い、朝鮮から人的・物的資源を際限なく略奪していった。

日本陸軍大将寺内は朝鮮総督として赴任すると、「朝鮮人はわが日本の法律に服従するか、さもなくば死ぬべきである」と暴言を吐き、その通り実行した。

朝鮮は文字通り一つの監獄、人間の生き地獄であった。

しかし、歴史教科書はこれについては一言も触れず、日本帝国主義の植民地支配を美化することに汲々としている。「韓国併合のあと、日本は植民地にした朝鮮で鉄道、灌漑の施設を整えるなどの開発を行い、土地調査を開始した」と記述しているのがその一例である。

しかし、ここで日本帝国主義が朝鮮を占領した後、鉄道、灌漑施設などを整備するといった「開発」をおこない、土地調査をした動機や目的については言及しておらず、それによって朝鮮人民がこうむった被害については一言だにしていない。

歴史教科書はまた、植民地支配期間、朝鮮人民に与えた人的・物的および精神的被害がいかに甚大なものであったかについても、狡猾な方法で縮小、もしくは一般的記述に代えている。

歴史教科書は、太平洋戦争の時期、朝鮮人民に強いられた徴用や徴兵が日本人の場合と同じであったとし、「皇民化」政策や創氏改名も「日本式の姓名を名乗らせた」という記述に代えることによって、その本質と目的を意図的に隠蔽している。こうした狡猾な方法で朝鮮人民の被害状況を極小化することによって、結局、日本が朝鮮人数百万人を犠牲にし、840 余万人を強制連行した罪悪の真相を巧妙に隠蔽しようとしているのである。

日本帝国主義が朝鮮から略奪していった希金属や鉄鉱石、それに米、綿花などの農産物や牛といった物質的財貨は、天文学的数字にのぼっている。

これとともに日本帝国主義は、朝鮮人民の民族性を抹殺し、朝鮮人民を「皇国臣民化」するために、朝鮮の言葉と文字、姓名まで完全に消滅させようとした。

歴史教科書でとくに重大なのは、日本政府と軍部による組織的行為であった日本軍「慰安婦」問題を故意に削除したことである。ほぼ 20 万人の朝鮮女性を性奴隷にした日本軍の犯罪行為はすでに歴史的事実として明らかにされ、これについては日本当局も認め、国連人権委員会でも糾弾されたことである。にもかかわらず、この重大な反人倫的犯罪を故意に隠蔽し、歴史の闇に葬ろうとしたのは、その犯罪にたいする厚顔無恥な責任回避であり、人倫・道徳と正義にたいする露骨な挑戦であり、断じて許されない大犯罪である。

4　侵略戦争を正当化する弁護

日本の中世、近代の歴史は海外侵略と略奪戦争によってつづられた血の歴史でもある。

中世の倭寇は朝鮮と中国の広い地域に侵入して殺人、略奪行為を働き、壬辰（1592）年には20余万の兵力を動員して朝鮮の国土全体を踏みにじった。近代以後には日清戦争につづいて日露戦争、日中戦争、それに太平洋戦争を引き起こし、朝鮮とアジアの広い地域を占領した。

日本における近代化の達成と資本主義の発展、物質的富の蓄積は、朝鮮人民と中国人民の膏血によってなされたものだと言える。略奪と殺人が倭寇、サムライの生活方式であったとすれば、戦争はその末裔である日本軍国主義者の生存条件であり、残忍性と狡猾性、略奪性はその属性であった。

歴史教科書はこの隠れもない事実に目を覆い、罪悪にみちた日本の海外侵略の歴史を正当なものとして描写し、その罪業を極微なものとしたり、無視、隠蔽している。

「壬辰倭乱」はその残忍性、野獣性において倭寇の侵略をほうふつさせる略奪的侵略戦争であった。にもかかわらず、教科書はそれをアジア大陸全体を支配せんとする「巨大な夢」、「意気さかん」な豊臣秀吉の壮挙であったかの如く描写し、侵略の開始についても「朝鮮への出兵」、「大軍を朝鮮に送った」などと模糊たる表現によって侵略を美化し、この戦争が朝鮮人民に与えた残忍な加害事実

についても「朝鮮の国土や人々の生活は著しく荒れ果てた」という言葉でごまかしている。

「壬辰倭乱」が朝鮮人民にもたらした災難と不幸は、人民生活が零落し国土が荒廃した程度のものではなかった。サムライたちは朝鮮に足を踏み入れた当初から、罪なき人民を手当たり次第に殺害し拉致し、そのうえ祖先伝来の数多くの文化財を破壊または略奪した。

今も日本の京都や岡山には、朝鮮人の鼻や耳をそぎ取ってつくった「鼻塚」「耳塚」がある。そこには無残に殺された朝鮮人の晴らしがたい怨念が宿っている。

朝鮮人を手当たり次第に殺害してもなお飽きたらず、そぎ取ってきた鼻や耳をもって「軍功」を論じたくらいであるから、朝鮮人民にたいする日本の野獣の如き侵略罪業は何をもってしても正当化されるものではない。

日本は近代以後にも、日清戦争から太平洋戦争にいたるまで、連続的に大小の戦争を引き起こして数々の犯罪行為を働いたが、教科書ではその真相をゆがめ責任を転嫁して、あえて罪業の美化につとめている。

日清戦争と日露戦争は、日本が朝鮮を植民地として独占する目的で、朝鮮に勢力を伸ばしていた清、露の勢力を駆逐して独占的支配基盤を築くために引き起こした侵略戦争であった。にもかかわらず、教科書では朝鮮を「中立国」にし、日本の「安全」を保障するために起こした戦争であったかのように歪曲し、とくに日露戦争は当時「弱肉強食の苛酷な世界」において「日本の生き残りをかけて」せざるを得なかった「壮大な国民戦争」であったかのように、その侵略性を隠蔽し正当化しようとしている。そして日露戦争での日本の

勝利を「世界を変えた日本の勝利」として描写し、「世界の抑圧された民族に独立への限りない希望」と「勇気」を与えたことにその意義があるかのように事実を転倒させて記述している。

太平洋戦争に関する記述においては、こうした破廉恥さがその極に達している。教科書は、この戦争が当時、日本帝国主義のアジア支配の野望であった「大東亜共栄圏」を確立するためのものであったとして、その侵略戦争を「大東亜戦争」と称し、「大東亜共栄圏」の目的はアジア「各国の自主独立、各国の提携による経済発展、人種差別の撤廃」にあったかのように歪曲し、親日かいらいたちが東京に集まって発表した「大東亜会議」の共同宣言（1943 年 11 月）によって「日本の戦争観念が明らかにされた」とした。さらには、戦争初期に日本が連合国軍を打ち破ることによって「長い間欧米の植民地支配のもとにいたアジアの人々を勇気づけ」、「日本軍の南方進出はアジア諸国が独立を早める一つのきっかけともなった」と、臆面もなく黒白を転倒させている。これは文字通り、「大東亜戦争」が白色人種の支配から黄色人種を解放するための「解放戦争」であったとした詭弁の再現である。

太平洋戦争はアジア全域を植民地化すべく野望を抱いた日本帝国主義の侵略戦争であり、「南方進出」は侵略戦争の遂行に必要な戦略物資を確保し、交戦相手の米英の太平洋における軍事拠点を撃破して、東南アジアの支配権を確立することにその目的があった。

「日本軍の南方進出」によって「独立」したという国はいずれも親日かいらい政権が樹立された日本の植民地であり、「大東亜共栄圏」とは本質上、日本帝国主義の勢力圏であり、旧植民地主義者による植民地支配体制であった。

日本帝国主義者は「大東亜新秩序」樹立のスローガンのもとに、アジア諸国の人民を無差別に虐殺した。現在までに明らかにされたその数は、中国で 3,500 万人、ベトナムで 200 万人、インドネシアで 200 万人、フィリピンで 110 万人、マライで 120 万人以上に達している。

この恐るべき殺人犯罪を隠蔽し、植民地再分割のための侵略戦争を「大東亜戦争」とし、日本帝国主義の植民地支配圏を「共栄圏」と描写するのは、実に是非の転倒と虚偽捏造における破廉恥の極みである。

侵略と正義を置き換え、日本の過去の罪業を隠蔽または正当なものとして歪曲する歴史捏造行為は、朝鮮戦争に関する記述においても露骨に現れている。

教科書は朝鮮人民軍の自衛的な防御と反撃を「侵攻」と断定し、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略を正当なものとして描写する一方、日本の犯罪的な戦争加担行為を隠蔽し、日本は「米軍に多く物資を供給」したとだけ記述している。これこそは歴史歪曲の典型である。朝鮮において戦争は 1947 年から、アメリカ帝国主義の差し金と関与のもとに、局地戦の形で 38 度線で絶えず繰り返された。米極東軍司令部にいたディビット・コンデやエイダー大佐などによって真相が赤裸々に暴露されたように、38 度線での「小さい戦争」はとりもなおさず朝鮮戦争の始まりであった。朝鮮戦争は全的にアメリカの世界制覇戦略と極東政策、李承晩かいらい政権の「北進統一」論の産物であり、この「小さい戦争」の延長であり拡大であった。アメリカ帝国主義と李承晩一味が朝鮮戦争を引き起こさざるを得なかった必然性や直接的な原因も、朝鮮の学界やアメリカ、日本の良識ある

学者たちによって明らかにされて久しい。日本は、アメリカの戦略上の要求にしたがって朝鮮戦争の計画や作戦図を作成して提供し、直接参戦して、米軍を積極的に支援した交戦相手である。「皇軍」出身の将校は米軍の各参謀部で道案内の役を果たし、多数の将校、兵士は「国連軍」とともに地上戦に参加しただけでなく、仁川（インチョン）、元山（ウォンサン）、群山（クンサン）、南浦（ナムポ）沖で掃海作業を担当し、多くの艦船、航空機で軍需物資を輸送した。日本全土が米軍の巨大な発進基地、修理基地、補給基地と化した。それゆえ、「国連軍」司令官であったリッジウェイでさえ、日本の全面的な協力がなかったなら米軍は朝鮮で3か月ももちこたえられなかっただろうと吐露したことがある。今日、日本では日本軍の朝鮮戦争参加の事実が公然の秘密となっている。

　それにもかかわらず、教科書はこの隠れもない歴史的事実を無視し、鉄面皮にも歪曲している。日本当局者はこうした歴史歪曲によって、解放後再び朝鮮人民にたいして犯した犯罪行為を覆い隠し、まぬがれようとしている。しかし、隠すことほど現れるものである。

　このように、教科書は日本の積年の侵略戦争を美化し、その性格と意義を途方もなく歪曲、転倒することによって、罪多き日本の歴史を美化し、日本はアジアの盟主になって然るべきだとする思想を露骨に宣伝している。

　日本の中学歴史教科書の朝鮮に関する記述に見られる歴史歪曲行為はきわめて重大である。教科書の歴史捏造は概して、編さん者の無知や史料解釈上の錯誤によるものではなく、日本当局の政治的目的達成のための故意的かつ意図的な行為に起因している。その意図的な行為とは、過去における日本の罪悪をうやむやにし、弱化させ、恥ずべき侵略罪業にたいする謝罪と補償を是が非でも回避しよ

うとすることであり、育ちゆく新しい世代に侵略思想を植えつけ、海外侵略に駆り立てようとすることである。これは歴史学の神聖な理念と使命にたいする許すまじき冒涜であり、2 重の犯罪行為である。

共和国の歴史学者は、歴史教育の神聖な使命を踏みにじる日本当局の不当な所業に厳重に抗議し、検定した歴史教科書をただちに撤回し歴史主義的原則にもとづいた真実の教科書を編さんし、次代に真の歴史教育を施すことを強く主張する。

同時に、日本当局者が政治小児式の思考方式を捨てて、罪多き過去の歴史を誠実に反省し、朝鮮人民に相応の謝罪と補償をすることを強く要求する。

われわれは、心ある日本および世界の歴史家と言論人が、日本における歴史歪曲策動と軍国主義の復活を阻止するために力強くたたかい、さしあたり日本の各県議会が歪曲された歴史教科書の採択を拒否するよう、抗議の声をひきつづき高めていくものと確信する。

朝鮮民主主義人民共和国歴史学会

2001 年 6 月 28 日

平　壌

ㄱ-183140